

3 節：史跡周辺の歴史的環境

市内では 818 カ所（平成 28（2016）年現在）の遺跡が確認されており、その分布状況は県内でも有数の密度です。しかし、未発見の遺跡もかなりの数が予想され、開発にともない発見される遺跡もさらに増加することが考えられます。

これまで、ほ場整備事業など農地開発、区画整理事業、道路・河川改修、建物建設などの開発にともなう記録保存を目的とした発掘調査のほか、遺跡の性格を明らかにする保存目的の発掘調査も実施されています。

本市の遺跡は、阿武隈川の支流である釈迦堂川や江花川・岩根川流域を岩瀬郡西部、滑川流域を岩瀬郡北部、上人壇廃寺跡を含めた旧須賀川市域を岩瀬郡中央部、さらに阿武隈川東側を岩瀬郡東部として区分することができます。岩瀬郡西部は旧長沼町や旧岩瀬村、さらに天栄村を含み、中通り地方と会津地方の結節点に位置しています。これらは、地勢上、会津地方の影響を受けたものが多くみられます。

一方、岩瀬郡東部は浜通り地方や茨城県へと至る街道が通っていたことから、これらの影響を受けたものが多く、岩瀬郡西部と東部では様相を異にします。上人壇廃寺跡の位置する岩瀬郡中央部はこれらの中間に位置しています。

1. 文献史料から見た石背の地名表記について

「イハセ」の漢字表記は、六国史など古代の文献では石背・磐瀬・石瀬・岩瀬と表記され、時代ごとに異なることが判明しています。

「石背」は「こくぞうほんぎ国造本紀」記載の石いわせこくぞう（くにのみやつこ）背国造の記事や、養老 2（718）年の陸奥国から石城・石背国が分置された記事（『続日本紀』）などがあり、最も古い表記です。なお、宮城県色麻町上新田遺跡 9 号竪穴の床面から「石背」と墨書された須恵器稜椀が（宮城県教育委員会『長者原貝塚・上新田遺跡』、宮城県文化財調査報告書第 78 集、1981 年）、多賀城跡から 8 世紀中ごろの「石背郡石口〔瀬〕郷〔 〕」と書かれた木簡が出土しています（『宮城県多賀城跡調査研究所所報 2016 多賀城跡』、平成 29 年）。

「磐瀬」は神護景雲 3（769）年の陸奥国人の一括賜姓記事をはじめ（『続日本紀』）、延暦 16（797）年（『続日本紀』）、嘉祥元（848）年（『続日本後紀』）、貞観 5（863）年・貞観 6（864）年・貞観 7（865）年（いずれも『日本三代実録』）、わみょうるいじゅうしやう『和名類聚抄』も「磐瀬」で、イハセ伊波世とよんでいます。『延喜式』も「磐瀬」の表記で、古代では最も多い表記です。また、米山寺経塚経筒外容器（承安元（1171）年）の銘文は「磐瀬郡」です。

「石瀬」は貞観 3（861）年（『日本三代実録』）に見えます。また、栄町遺跡から出土した墨書土器に「石瀬」があります。

岩瀬は保延 4（1138）年の上遠野文書が初出で、これ以降は「岩瀬」あるいは「磐瀬」が大半です。「岩瀬」の表記は中世以降と思われます。

以上の通り、古代の文献や金石文からは、古い段階では「石背郡」のちに「磐瀬郡」となり、中世には「岩瀬郡」へ変化することが分かります。正確には「石背郡」と「岩瀬郡」

はその範囲などが異なると考えられますが、煩雑さを避けるため、本計画では、便宜的に古代については原則「石背郡」、それ以降の時代については「岩瀬郡」の文字を用いています。

2. 古代の石背郡成立以前の様相（旧石器時代～古墳時代）

旧石器時代の遺跡は少なく、現状では岩瀬郡中央部の乙字ヶ滝遺跡（前田川地区）があげられるのみです。玉川村と隣接する阿武隈川左岸の段丘上に位置し、旧石器時代後半の刃部磨製石斧や面的加工が施されたナイフ形石器などが出土しています。

縄文時代の遺跡は岩瀬郡西部や岩瀬郡東部の丘陵上に多く、岩瀬郡中央部にはあまり多くありません。岩瀬郡中央部は、縄文時代が主体となる遺跡はほとんど見出すことができませんが、上人壇廃寺跡周辺の栄町遺跡では縄文時代前期を中心とする落し穴状遺構や土器が、釈迦堂川対岸の要害館跡（要害遺跡）では縄文時代中期の土器が採取されており、生活の痕跡を垣間見ることができます。岩瀬郡東部の代表的な遺跡として、縄文早期～中期の関向・富岡遺跡（下小山田地区）、晩期の一斗内遺跡（小倉地区）・牡丹平遺跡（小倉地区）などがあります。

一方、岩瀬郡西部の代表的な遺跡としては、早期初頭の井草Ⅱ式段階の撚糸文系土器が出土している寺山A遺跡（江花地区）、中期の越後に特徴的な馬高式系統の人面突起付土器が出土した塚越遺跡（長沼地区）、後期の掘立柱建物跡を確認した境ノ内前遺跡（小中地区）などがあります（第19図）。



第19図 縄文時代 ①塚越遺跡出土人面突起付土器 ②塚越遺跡出土石冠
③境之内前遺跡の掘立柱建物跡（柱根）

弥生時代の遺跡は縄文時代に比べて少ないですが、再葬墓（土葬後、ふたたび骨を取り上げて壺などに埋葬した墓）が岩瀬郡西部や岩瀬郡東部で確認されています。岩瀬郡西部の薊ノ内A遺跡（梓衝地区）、岩瀬郡東部の牡丹平遺跡（東山地区）などがその代表で、特に、牡丹平遺跡では、成人女性の人骨がほぼ一体分残っていました。上あごに抜歯の痕跡があったことなどから、被葬者は縄文時代の系譜を有するものとの所見が得られています（第20図）。



第 20 図 弥生時代 ①牡丹平遺跡遠景 ②牡丹平遺跡出土壺 ③牡丹平遺跡出土人骨
④薊ノ内 A 遺跡の再葬墓

一方、岩瀬郡中央部には、阿武隈川左岸の丘陵に所在する弥六内遺跡（和田地区）、芦田塚遺跡（芦田塚地区）等の集落跡があります。近年、高木遺跡（浜尾地区）でこれまで中通り地方でほとんど見られなかった弥生時代後期の集落が多く確認されており、新たな知見が得られています。

弥生時代後半から古墳時代初頭の方形周溝墓や前方後円墳等は、イカヅチ古墳群（和田地区）や仲ノ平古墳群（江持地区）などが確認されています。イカヅチ古墳からは北陸地方に影響を受けた土師器鉢が出土しています。また、阿武隈川東岸の団子山古墳（日照田地区：市指定史跡）は、福島大学の継続的な調査で、4 世紀代の長さ 67 m 程度の方形後円墳であることが判明されました。中通り地方では古墳時代前期の古墳は少なく、大玉村、郡山市、そして本市に存在していますが、団子山古墳はこの南端部に位置しています。集落は八ッ木遺跡や高木遺跡（ともに浜尾地区）など阿武隈川沿岸に認められ、調査の所見では、この時期に大規模な洪水があったことがわかっています（第 21・22 図）。

古墳時代中期の古墳や集落も阿武隈川沿岸に多く認められます。木炭櫛^{もんとんかく}の主体部を有する甲塚古墳（浜尾地区）や箱式石棺を有する仏坊古墳群（市野関地区）のほか、上ノ代遺跡（日照田地区）ではこの時期の豪族居館が確認されています。

古墳時代後期になると、これまでの阿武隈川流域とは別に、岩瀬郡西部の釈迦堂川・江花川・滑川水系にも古墳が築造されるようになります。特に、阿武隈川流域の岩瀬郡中央部は、福島県内や東北地方を代表する古墳が多いのが特徴です。

主要な古墳として、塚畑古墳（和田地区）、大塚古墳（前田川地区：市指定史跡）、東北最大級の横穴式石室を持つ蝦夷穴古墳（和田地区：県指定史跡）が挙げられます。

塚畑古墳は、大仏前 15 号墳や大仏横穴群とともに大仏古墳群に包括されます。全長 40 m の前方後円墳で、主体部はすでに壊されて残存していませんでしたが、古墳の周溝から 6 世紀代の人物埴輪や円筒埴輪が出土しました。天冠をかぶった人物埴輪などは現在の茨城県方面などで多く見つかっている特徴的な作りのものであることが近年判明しています。

大塚古墳は、長さ 11 m と東北地方では長大な横穴式石室を有する直径 30 m の円墳で、6 世紀代の築造と考えられています。蝦夷穴古墳は 7 世紀代の古墳で、長さ 8.2 m 程度の切石積みの横穴式石室を有する直径 37 m 程度の円墳です。明治時代に頭椎大刀^{かぶつちのたち}や圭刀大刀^{けいとう}が出土しており、これらの出土遺物は現在東京国立博物館に所蔵されています。このほか、横穴墓も古墳の周囲に多く立地しています。

古墳時代後期の集落は、ハツ木遺跡や高木遺跡（ともに浜尾地区）など阿武隈川流域のほか、この時期になると上人壇廃寺跡の位置する釈迦堂川沿いやその西側にもいくつかつくれるようになります。

栄町遺跡では、7 世紀後半の東北地方では数少ない発見例となる評衙^{ひょうが}（評^{ひょう}は郡成立以前の行政単位）が確認されています。この周辺にうまや遺跡なども位置し、阿武隈川流域から集落が一部移動しています。

岩瀬郡西部では、広戸川沿岸に全長 48 m 程度の前方後円墳である龍ヶ塚古墳（岩瀬郡天栄村）をはじめ、江花川沿岸に T 字形の石室を有する塚下古墳（長沼地区）、才合地山横穴墓（梓衝地区：市指定史跡）などの古墳や横穴墓のほか、集落を囲む溝を有する梓塚遺跡（木穴崎地区）や九郎五郎内遺跡（堀込地区）、本宮遺跡（保土原地区）などの大集落があり、阿武隈川沿岸とは異なる勢力が存在したと考えられます。このほか、滑川・岩根川沿岸の跡見塚古墳や下山古墳群（柱田地区）、治部池横穴墓群（滑川地区）や神成横穴墓群（舘ヶ岡地区：市指定史跡）など、岩瀬郡北部にも古墳や集落が認められ、古墳時代後期は市内の各地に拡散する様相となります（第 21・22 図・56 図）。

この古墳時代後期の豪族について記したとされる文献史料に「国造本紀」（『先代旧事本紀』^{せんだいくじほんぎ}卷十）があります。ここには現在の岩瀬郡を支配した豪族として「石背国造」と記載され、「石背国造」は建許呂命^{たけころのみこと}の子である建弥依米命^{たけみよめのみこと}が任命されています。中通り地方の国造は天湯津彦命の系統であるのに対して、石背国造のみが浜通り・常陸地方などと同様な天津彦根命、もしくはその子孫の建許呂命^{たけころのみこと}の系譜に属します。このことから、中通りのほかの国造とは異なり、政治的には浜通りの影響を受けた可能性があります。

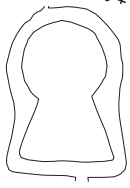


第 21 図 古墳時代の土器と集落

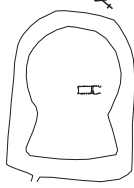
- ①古墳時代前期（4 世紀第：ハツ木遺跡出土）
- ②古墳時代中期（5 世紀第：上ノ代遺跡出土）
- ③古墳時代後期（7 世紀：ハツ木遺跡出土）
- ④ハツ木遺跡（上が北、右側が阿武隈川）
- ⑤上ノ代遺跡の豪族居館

主要古墳集成

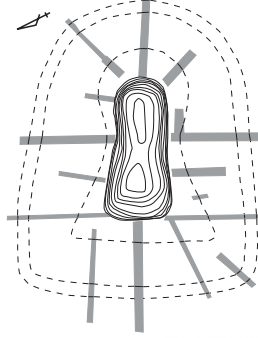
塚畑古墳
(須賀川市教委 1974a)



大仏前 15 号墳
(須賀川市教委 1974a)



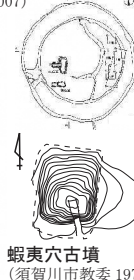
竜ヶ塚古墳 (天栄村)



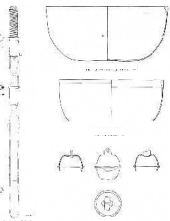
市野関稲荷神社古墳
(福島大学考古学研究室 2007)



塚下古墳 (長沼町 1996)



蝦夷穴古墳出土遺物
(菊地ほか 2009)

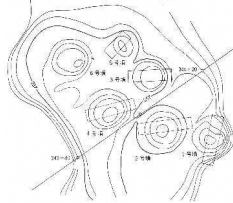


蝦夷穴古墳
(須賀川市教委 1974b)

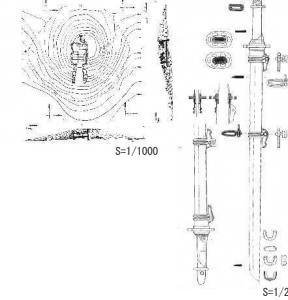
早稲田古墳群
(福島県教委 1982)



一斗内古墳群
(福島県教委 1975)



稲古館古墳
(須賀川市教委 2003)



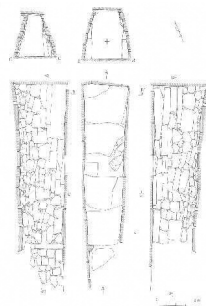
0 40m
(1/2000)

横穴式石室

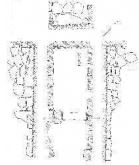
塚下古墳
(長沼町 1996)



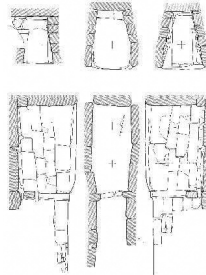
前田川大塚古墳 (福島 1986)



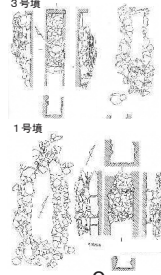
大仏前 15 号墳
(須賀川市教委 1974b)



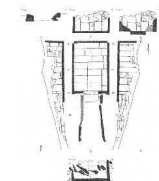
蝦夷穴古墳 (福島 1986)



一斗内古墳群
(福島県教委 1975)



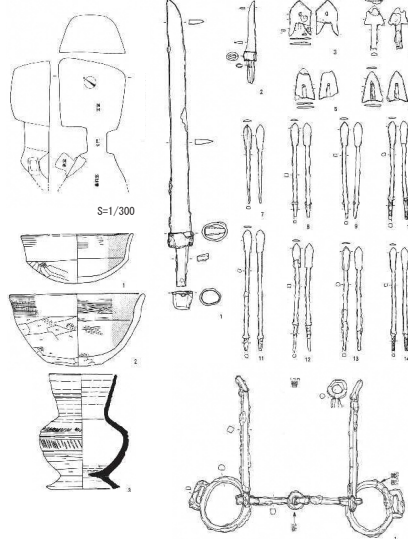
稲古館古墳
(須賀川市教委 2003)



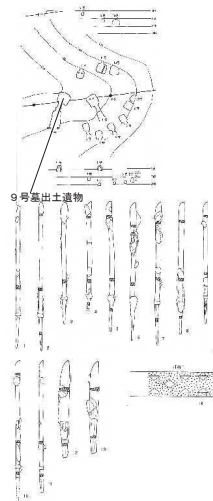
0 10m
(1/400)

横穴墓

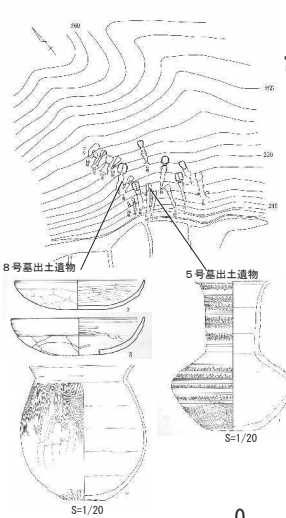
才合地山横穴 (長沼町 1996)



梅田横穴墓群 (福島県教委 1975)



治部池横穴墓群 (福島県教委 1980)



富士見山横穴墓出土銅椀
(天栄村 1986)



0 40m
(1/2000)

遺物：記載のないものは S=1/10

第 22 図 石背郡内主要後期～終末期古墳集成

3. 古代の石背郡存続期の状況（8世紀～12世紀）

奈良時代に石背郡が成立し、阿武隈川と釈迦堂川の合流地点に石背郡衙関連遺跡群が形成されます。また、養老2（718）年に陸奥国から石城・石背国が分置されるのもこの時代です。

前代の古墳時代の古墳や集落が阿武隈川沿岸に多いのに対して、奈良時代の集落はその拠点域が北西側に移動します。これは、律令体制下で官道の東山道が設置されたことや、古墳時代に拡大した岩瀬郡西部などの集落を結ぶ河川として釈迦堂川が重要視された結果と推測されます。上人壇廃寺跡、石背郡衙としての栄町遺跡、官人集落としてのうまや遺跡、在地豪族の氏寺的な性格を有する米山寺跡などがその代表です。このほか、阿武隈川南岸や釈迦堂川東岸には要害遺跡（中宿地区）や仲の町遺跡（中宿地区）などがあります。

また、山間地の開発にともなう集落が形成されるのもこの時期からで、岩瀬郡東部の川屋向遺跡（雨田地区）や松原遺跡（日照田地区）などがその代表です。うまや遺跡や川屋向遺跡では関東地方の影響を受けた土器が多く出土しており、活発な人的・物的交流があったものと推測されます。また、これまで集落が少なかった岩瀬郡東部や北部に集落が点在するようになります。特に岩瀬郡東部はこの時期に本格的な製鉄が行われた可能性が高く、集落では鍛冶関連遺物が多く出土します。

古墳は、釈迦堂川流域に稲古舘古墳（稲地区）があります。古墳時代後期とは大きく異なる横穴式石室を有する長さ12mの円墳で、石室から正倉院宝物に類似する大刀が出土しており、郡司クラスの墓と推定されます。このほか、梅田横穴墓（西川地区）や一斗内古墳群（越久地区）もこの時期に埋葬ないし追葬されている可能性が高いと思われます。これらはいずれも阿武隈川ではなく、釈迦堂川や滑川沿いである点が注目され、古墳時代後期の有力な古墳や集落が希薄で、前代からの継続性がみられない地域に構築されているのが特徴です。古墳時代とは異なる新たな支配体制となったことがうかがわれます。

平安時代の集落は、特に9世紀から10世紀代にかけて書かれた『和名類聚抄』に記載されている郷単位で、掘立柱建物を中心とする官衙に類似する施設が各地でみられるようになります。

『和名類聚抄』はいくつかの写本が伝わっていますが、このうち名古屋市博本には、現在の岩瀬郡の郷名として「磐瀬・椎倉（高山寺本では「椎倉」、元和本で「推会」と記載）・ひろかど やまだ よ こ しらかた廣門・山田・余戸・白方」の6郷を挙げています。磐瀬郷は岩瀬郡中央、山田郷が岩瀬郡東部、白方・余戸郷が岩瀬郡北部、椎倉・廣門郷が岩瀬郡西部に相当すると考えられています。

岩瀬郡北部の白方郷では矢ノ目A遺跡（仁井田地区）、岩瀬郡東部の山田郷では沼平東遺跡（小倉地区）、岩瀬郡西部の椎倉郷は薊ノ内A・B遺跡（梓衝地区）、廣門郷は志古山遺跡（岩瀬郡天栄村）がその代表で、これら遺跡の周辺に竪穴建物を主とする集落が点在しています。また、岩瀬郡東部の平ヶ谷地遺跡（狸森地区）など標高350mの山間地に小規模な集落がつくられるようになります。奈良時代の山間開発が継続したもののですが、より広範囲に拡散していく傾向です。手工業関係の遺構は岩瀬郡東部の関林D遺跡（田中地区）で、鉄製品の生産工房、岩瀬郡北部の矢ノ目A遺跡では、土器工房や鉄製品の生産工

房跡があります。特に岩瀬郡北部は、関下窯跡に代表される須恵器窯が多く、良質な粘土産出を背景に大甕などを各集落へ供給していました。一方、郡衙などのある中央部は、上人壇廃寺跡や栄町遺跡など丘陵地・台地上の遺跡は存続しますが、うまや遺跡は平安時代に入ると急激に集落が縮小し、拠点域がほかの場所に移動します（第56図）。

郡衙としての栄町遺跡は10世紀中葉、上人壇廃寺跡も10世紀前半に廃絶します。竪穴建物の終末は関林D遺跡6号住居（田中地区）の10世紀末で、丘陵上に1・2軒と小規模な集落が多く形成されています。11・12世紀はさらに不明瞭で、散発的に土器が出土しているのみです。

史跡米山寺経塚群は、承安元年の年号を有する陶製の経筒外容器や銅製の経筒などが明治時代に出土しました。天王寺経塚（福島市）・平澤寺経塚（桑折町）でも同じ施主が埋納しており、平安末期における仏教文化のありかたを考えるうえで貴重な資料です。

■石背郡衙関連遺跡群の概要

① さかえまち 栄町遺跡

栄町遺跡は、阿武隈川と釈迦堂川の合流地点西側の台地上に立地しており、現在のJR須賀川駅前の南側に位置しています。

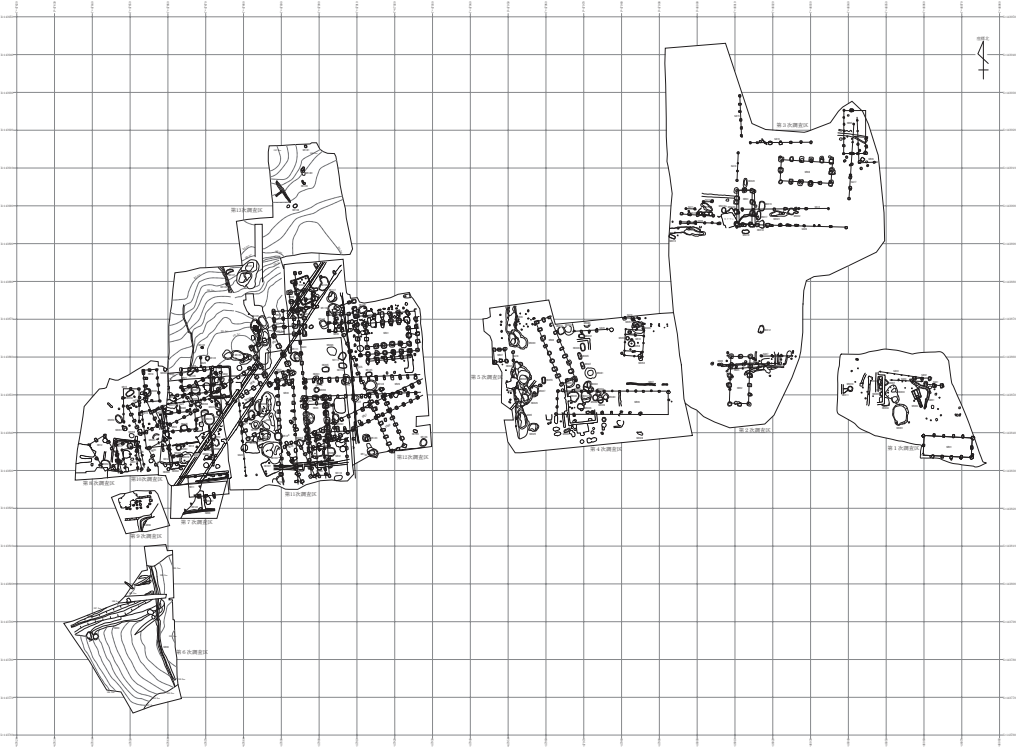
須賀川駅前土地区画整理事業にともなう発掘調査を、平成8（1996）年度から平成17（2005）年度にかけて行った結果、ちょうしゃ長舎や正殿と考えられる掘立柱建物跡や区画の溝などを確認し、奈良・平安時代の陸奥国石背郡衙であることが判明しました。

これまで、掘立柱建物跡約50棟のほか、門跡・竪穴住居跡・柱列・溝跡など多くの遺構が検出されています。特に、平成16（2004）年度の調査では、郡衙の中心的な施設である「郡庁院」の建物群を確認しています。

調査の結果、郡庁の建物群は最も古いもので郡成立以前の評とよばれる時代の役所（評衙）の7世紀後半から、奈良時代の石背国設置前後の時代の役所（郡衙）、平安時代の9世紀代、役所が廃絶する10世紀代に至るまでの、大きく6時期に分けられます。

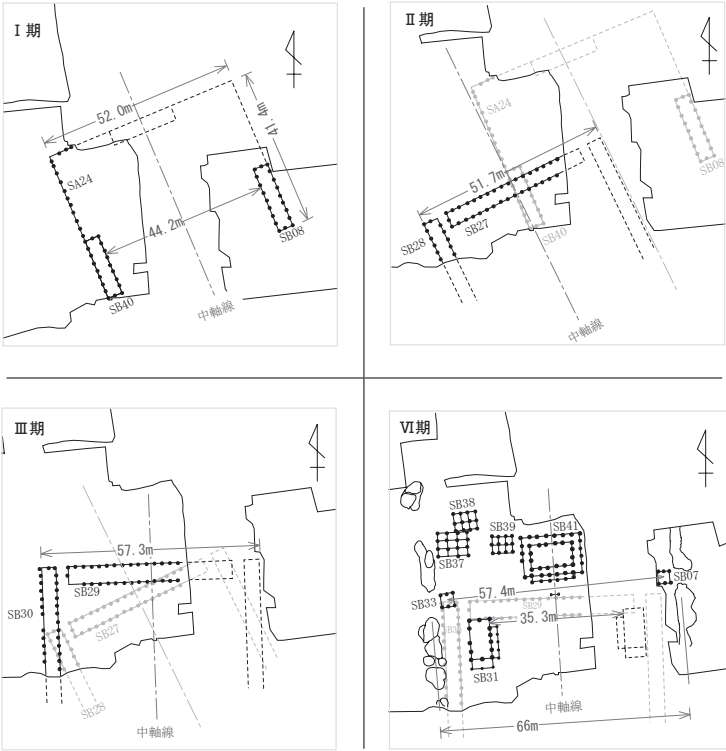
9世紀代の建物の柱穴からは「石瀬」と書かれた墨書土器が出土しました。「石瀬」は文献資料でのみ見られていましたが、実際に「石瀬」郡が使われていたことが初めて証明されました。また、役所の文書で使用した陶製の硯（黒色や朱色の墨を使用）や全国的に類例の少ない方形の土師器皿などが出土しています。

なお、これまで石背郡衙の郡庁院を確認していますが、郡衙を構成する正倉院（田租などの収納施設）、館院（国司などを迎え、宿泊や饗応などを行う施設）、厨院（食料供給を行う施設）などは未発見です。通常、郡庁院の近くにあることが多いことから、この遺跡周辺に存在している可能性が高く、今後の調査が期待されます（第23・24図）。



栄町遺跡遺構配置図

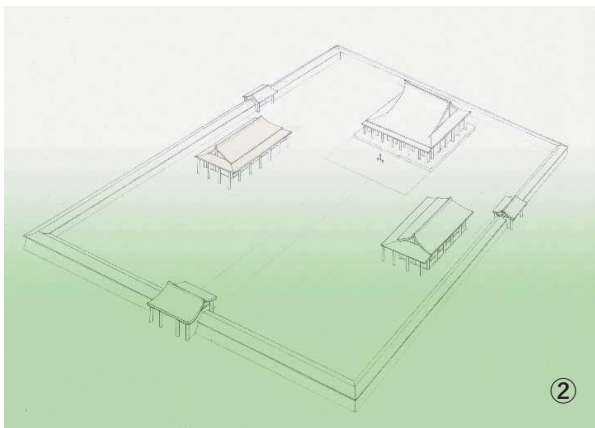
0 50m
(1/2000)



郡庁院建物配置図

第 23 図 栄町遺跡（1）

0 50m
(1/2000)



- ①栄町遺跡（南から撮影）
- ②郡庁院想定図（9世紀代）
- ③「石瀬」墨書土器
- ④モニュメント

第24図 栄町遺跡（2）